

## 総 括

フレデリック・クレインス

まずは、発表者、コメンテーター、そして司会者の方々に感謝を述べたい。この3日間は本当に刺激的な発表とコメントがたくさん出され、そして、日文研の今後の方向性を考える上でも非常に有意義なディスカッションが行われたと思う。

総括をするようにとのことで、簡単に私の感想を述べたいと思う。

文明というのは、先ほど牛村先生からも少しご指摘があったが、非常に難しい言葉であり、この3日間、文明とは何なのかということについてかなり議論されたと思う。私がちょっと感銘を受けたのは、榎本先生の話で、明治維新期の留学生について、遣唐使と比較されるのに、中世の鎌倉、南北朝時代の留学生との比較がなされないのはなぜかというようなことをおっしゃっていた。これはこのシンポジウムの問題提起につながるものだったのではないか。

つまり、文明という言葉を使うときには、かなりの程度でその人の価値観や歴史認識が投影されている。ある人から見ると重要なものが、ほかの人にとっては重要ではなく、別のものが重要に見えるということがある。そこには価値観の違いが存在する。それでも、学問伝統上主流の西洋的価値観からは、やはり文明とはシヴィライゼーションであり、そこにはシヴィライズ礼賛という価値判断がすごく入っている。文明化された国と文明に追いついていない野蛮な国という区分けがなされる。牛村先生がお話しされていたことだと思うが、日本は40年ぐらい後れていると明治維新のときに計算されていたそうである。本当にそんな計算ができるのだろうかと少し驚きをもって聞いていた。

そうした偏った価値判断、つまり、ある種の優越感から暴力とか差別が生まれるのではないか。それに関連した話として、越智先生によるお墓の話では、琉球が日本化されたりアメリカ化されたりするというご指摘もあり、牛村先生のお話では、「文明の裁き」にまで至っている。そこには西洋文明至上主義とそれに対する疑問という意味合いも込められていることが強く感じられる。

実は、私も文明という言葉はあまり好きではなくて、文化という言葉のほうを好んで使っている。国際日本「文化」研究センターという名称でよかった。今後もぜひそのままにしていきたいと思う。

あと、牛村先生がご紹介されていた、文明一元論ではなく多元論という竹内好先生のご指摘については、文明がさまざまあるなかで、さらに一つの文明の中にも多様性が存

在するのだと気づかされた。古田島先生が、記録をするときにどの媒体を使うのかに着目して、和文を使うのか漢文を使うのか候文を使うのか、同じ文化、文明の中でもいろいろな選択肢があるということをおっしゃっていたが、このように、ひとことで文明と言っても決して単一的なもの、固定的なものではないということが、初日のご発表から分かった。

そして、太田先生も、異文化接触によって視野を広げたり、物事を別の視点で捉え直したりすることに関してご提言をされていた。そのご発言を読み解くと、文明・文化は絶えず変わっていく、変化していくということだと思う。さきほど劉先生もおっしゃっていたが、戦前の日本と今の日本はかなり違う。私が日本に来た平成元年と今の日本も、かなり違っていていると感じている。文化は変わっていくものであり、そして、その変化とは、ほかの文化との接触によっても引き起こされていくわけなので、その現象を正確に捉えるのはなかなか難しいと思う。

そして、もう一度価値観の話に戻るが、私が非常に感銘を受けたのは、米欧重回覧の会のお二方のご発表だった。小野先生は近年、西洋近代思想の普遍性に対して、やはり揺らぎが出てきているとおっしゃっており、もはや正解のない時代に突入しているご指摘された。そして、その潮流に対しては漸進主義、そして稲盛和夫さんの利他思想が重要になるのではないかとおっしゃっていた。そしてさらに泉先生は、西洋的な「モアモア」の文明ではなく、「適適文明」を考え直さなければならぬとおっしゃっていた。この話を伺ったとき、京都の龍安寺にあるつくばいに「吾唯足知」という言葉が刻まれているが、すぐそれを思い起こした。

2日目には、今後の日本文化研究をどのように進めていくかについての幾つかのセッションがあった。特に田中先生からは、日本は積極的に外へ向かうべきだとの提言があった。そして、最終日である本日に酒井先生も同じようなことをおっしゃっていて、まず日本文化を客体としてではなくて、一つの主体として捉えるべきであるとともに、日本だけが主体なのではなくて、ほかにも多くの主体があるということを認めながら、それと付き合っていくという提言をされていたと思う。

そうした前提のもとで世界に発信していくべきだという提言を受けたのだが、その後のディスカッションのときに日本が外に出るだけではなくて、交流が双方向でなければならないとの発言が追加されたと思う。

こうした提言を踏まえ、日文研が今後どのように進んでいくべきかということを考えると、やはりさらに世界への発信に力を注ぐとともに、もっと多元的な国際交流を増やしていくことが求められていると思った。どのようにそれを実現するかは今後の課題にしたい。

最後になったが、冒頭の瀧井先生のご発題として取り上げられたハンチントンの「文明の衝突」の再検討について触れておく。まず、ハンチントンは日本を単一的な文明として捉えていたが、このシンポジウムでの議論の成果を受けると、日本はほかの文明と

絶えず有機的に相互作用を起こしながら、常に変化を遂げてきた多様性に富む文明であるということが、結論としていえると思う。これはおのずからハンチントンの単一的文明説を否定するということにつながるであろう。

次に、日本が将来的に孤立するというハンチントンの予想については、やはり将来どうなるのか誰にも分からない。酒井先生が先ほど予想できなかったとおっしゃっていたが、歴史を刻みながら物事が日々どんどん移り変わっていくなかで、少し先の未来でも予想するのは不可能なことだと思うので、どうかご自分を責めないでいただきたい。学問というのは、今あるものと昔のものを実証的に研究したうえで、そこから将来に起こりうるいろいろな可能性を探究することではないかと思った。

仮にハンチントンの予想が奇跡的に当たって、日本が本当に孤立してしまったとしても、これもスクリーチ先生が先ほどおっしゃっていたことだが、江戸時代はほぼ鎖国していた。鎖国しているにもかかわらず、例えば出島という小さな人工島を通じて海外との非常に活発な学問的交流が続いていた。もちろん中国人とも交流が続いていた。国を鎖しながらも「四つの口」があったというぐらいであり、どんなに孤立したとしても鎖のあいだを通じた交流は保たれると思う。もしも孤立したならば、日文研が新たな出島的存在になって、交流の窓口としての役割を担えばよいと思う。